

大学受験における浪人の効果

—— 計量分析を用いて ——

An effect of a rounin in a university admission.

—— From measurement analysis ——

西 丸 良 一

要 旨

本稿では、高校→大学の移行期に焦点をあて、浪人することが現役時よりも学力を高め、より難易度の高い大学に進学する効果をどれ程もつのか分析する。分析の結果、浪人することは、現役で大学に入学するよりも、大学難易度をより高める効果が確認された。だが、二浪以上すると大学難易度が低くなり、同じ高校ランクであっても、現役で大学に入学した者より低い結果となった。さらに、二浪以上の大学難易度の低下が、高校ランクAとB、C、Dとで大きく二極化している。二浪以上は、さらに受験勉強する時間が多い分、それに比例して学力が上がるわけではなかった。そこには意欲の減少が考えられ、その意欲を維持できるものは、やはり高校ランクが高い者、もしくはそれと因果関係にある社会階層の高い者である可能性が示唆された。

キーワード：浪人 大学 受験 高校 社会階層

1. はじめに

2005年度、大学・短期大学への進学率が51.5%（過年度生を含む）に達しており、日本においてもトロウ（1973=1976）¹⁾ のいうマス教育の段階からユニバーサル教育の段階に突入している。トロウによると、こうした高等教育の発展段階によって選抜原理も異なるとしており、ユニバーサル段階においては、入試による選抜というよりも、個人が自発的に高等教育機関とかわりを選択するか否かが入学の基準（1973=1976：75）になるという。確かに、日本は高等教育の大衆化や少子化にともなって、2007年度には大学・短大の志願者数が入学者数と一致する「大学全入時代」に入る。しかし、大学入学者のほとんどが現役入学の状態になったわけではない。浪人は、2005年度の全大学・短期大学

進学者数703,191人から現役生大学・短期大学進学者数568,336人を除く145,855人であり、その割合は19.2%にもなる（文部科学統計要覧—平成18年版—より算出）²⁾。浪人率は一時期に比べてずいぶん減少したようにも感じられるが、19.2%という数字は「大学全入時代」が到来すると言われ続けているわりに、少ないとは思えない。こうした数字は、浪人することで現役時よりもランクの高い大学に進学しようとするあらわれと捉えることができよう。では、浪人することは現役時よりもさらに学力を高め、より難易度の高い大学に進学する効果をどれ程もつのであろうか。

本稿では、高校→大学の移行期に焦点をあて、現役での大学進学と浪人での大学進学とを比較することで浪人の効果を検討する。まず2や3で浪人を考察するに必要な先行研究を概観し、大学受験への浪人がどれほどの効果をもつのか

があまり検討されてこなかったことを提示する。4ではデータの概要を述べ、5の分析では、これまで多くの研究で明らかにされてきた高校ランク×大学ランクのクロス集計に「現役か浪人か」でコントロールし比較をおこなう。そして、重回帰分析を用いて各変数が大学進学に独立してどれほど効果をもつのか分析する。最後に分析を通じて明らかになった知見について考察をおこなう。

2. 浪人に関する先行研究

浪人をメインテーマとする研究は関口や後藤に端を発する。関口(1956)によると浪人は有名高校卒業生が多く、大部分が浪人して有名大学に入る一方で、それほど進学率が高くない高校では、浪人せず学力が低くても金があれば入れる大学に入る(関口 1956:77)という。また後藤(1961)は、有名大学への入学を志願する受験生が予備校で一年間学力を養い、有名大学へ入学することはごく自然なことであるとしており、「六・三・四・四制がふつうである」(後藤 1961:91)とも述べられている。つまり、大学・短期大学への進学率が10%ほどで、トロウの示すエリート段階にあったこの時期において、浪人は有名大学に入学するための有名高校出身者がおこなうものであった。

近年においてはどうかだろうか。ベネッセ未来教育センター(1999:69)によれば、第一志望の大学や短期大学に入れなかった場合、どうするかの間に対して、高校ランクが高いほど「浪人する」(高校A 34.7%, 高校B 16.5%, 高校C 9.9%)と答えている。こうした結果は、高校ランクが高いほど、野心をもち、入試難易度の高い大学を志願するエリート高校の者が、浪人してでも第一志望の大学に入ろうとしているとみてとれる³⁾。しかしその一方で、「合格した第二、第三希望の大学・短大に入学する」(高校A 55.7%, 高校B 63.3%, 高校C 55.7%)

という間に対して、答えている者は高校ランクが高いほどその比率が極端に低いわけではない。大学・短期大学への進学率が51.5%というユニバーサル段階にある現在において、浪人はエリートだけがおこなうものではなくなったという見方もできる。

では、なぜ受験生は浪人するのか。それは「現役時代に落ちた大学はもちろん、さらに上のランクの大学を受験するため」だと考えられている(塚田 1999:82)。エリート段階の時期のように、浪人することでトップクラスの大学に入学しようとするのではなく、ユニバーサル段階においては、前年度よりも1ランク上のトラックにあたる大学に入学することを目標としているのである。

3. トラッキング概念

教育システムにおいて、ある一定のトラックに置かれる、つまりトラッキングされると、なかなかそのトラックから上のトラックに移動することはできず、同じトラックを走らざるをえない。高校から大学への移行の際は、ほぼその高校に見合った大学に進学していることがそれをよくあらわしている。そうしたなかで、「浪人」は、教育達成において最終段階とされる大学入学までの最後の上方へのトラック間移動のチャンスであるとみなすことができる。

トラッキングとは、個人の特性、成績、アスピレーションに基づいて生徒を同質集団へと分類し、同類の学力から成る教室編成をおこなうことをいう(Rosenbaum 1976:6)。日本におけるトラッキング研究は、進学が普遍化し、学力による階層化が著しい高校がその際たる対象である。なぜなら、その後の進路に大きく影響する要因は「どのような高校に進学するか・どれほどの学力水準であるか」と考えられてきたからである(近藤 1982 吉本 1984 尾嶋 2001)。そうした状況をうまく説明するものと

表1 高校別大学進学結果(%)

大学(学部) 偏差値	不明*	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	70-74
A 高校(67, 63)**	0.6	0.0	0.6	3.1	26.5	37.8	21.7	9.8
B 高校(61)	6.2	0.4	0.8	12.0	38.4	35.3	6.2	0.8
C 高校(56)	0.6	3.5	7.1	27.7	37.1	22.9	1.2	0.0
D 高校(53)	14.1	6.5	24.1	30.6	17.7	6.5	0.6	0.0
E 高校(44)	33.3	0.0	16.7	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注) () 内は偏差値

* 不明のほとんどは入学難易度が低い

** A高校には特別コースと一般コースがあり、それぞれの偏差値が67, 63

出典: 竹内(1991)

して、ローゼンバウム(1976)の「トーナメント移動」がある。この移動は、まさしくテニストーナメントのように、選抜に勝利したとき、次の試合に参加する権利だけを獲得でき、敗北したとき、それらを永久に失う。このシステムにおける開放性は、バルブのように、下降だけに開いている(Rosenbaum 1976: 40) 移動理論である⁴⁾。

一見、ローゼンバウムのトーナメント移動は、どのような高校に進学するかにより、卒業後の進路を決定する日本にもあてはまりそうである。しかし、日本の教育制度において「負ければ次の試合に参加する権利がない」ということはない。竹内(1991)は、表1で高校から大学への進学の際、偏差値65以上の大学にB高校は7.0%進学しているが、A高校の68.5%はこれらの大学に進学できておらず、若干ではあるが上下ランクの逆転があり、日本においては御破算移動であるとしている。

もちろん高校入学時に学力による選抜が行われている以上、高校ランクと進学する大学ランクとの関係があることは否定できない。しかし、竹内が焦点をあてる問題は、にもかかわらずかなりの「敗者復活」が行われているということであり、そこにこそ注目すべきであろうと指摘する。

では、高校→大学の移行の際の敗者復活を考えたとき、どのような方法が考えられるのだろうか。もちろん高校受験に失敗し、高校3年

間で学力を十分に養い、大学受験では大きくランクを上げる者もいるであろう。しかし3年間という同じ時間を与えられたなかで大きく飛躍するには、やはり予備校等に通い「浪人」することが最後のチャンスであることは想像に難しくない。竹内の示す表1の各高校における浪人率もA高校25.6%, B高校31.3%, C高校21.2%, D高校30.5%, E高校に関しては88.0%となっており(竹内 1991: 36), 浪人することによる敗者復活の可能性が大きいことは疑いもない。だが、浪人することにより、将来の地位達成に不利益はないとし、現役と浪人を同一年度の進学結果として比較の俎上にのせているため、浪人することで敗者復活していることは明確に示されていない。

このように、これまでの研究では、浪人することどれ程の学力を養い、トラック間を上昇移動するようなかたちで大学進学を果たせるかを明らかにした研究は意外と少ないのである。

4. データの概要

本研究は「浪人することが大学進学にどれほどの効果を持つのか」を明らかにすることである。そのためには、大学に入学した時点到達地点に設定し、経路をさかのぼれるデータが必要である。そこで、関西圏の9大学の社会学系・人間科学系に入学した2004年度大学1年生を対象とし、2004年4月と7月の出席率の比較的高

い時期を見はからい、必修科目（一部選択必修）受講生を対象に各大学の授業時間に質問紙を配布、即時回収というかたちで調査をおこなった。

表2 調査対象校の内訳

		難易度	性 別		合 計
			男	女	
A	A 1	65.0	50	77	127
	A 2	60.0	79	108	187
	A 3	57.5	82	81	163
B	B 1	52.5	97	55	152
	B 2-1	50.0	110	93	203
	B 2-2	47.5	74	39	113
	B 3	50.0	0	176	176
C	C 1	40.0	57	44	101
	C 2	35.0	32	22	54
	C 3-1	35.0	43	36	79
	C 3-2	32.5	59	7	66
			683	738	1,421

注) 入試難易度は河合塾『2003 Vol.3 栄冠めざして——2004年度入試難易度予想ランキング表決定版』から
A 1 大学は国立大 B 3 大学は女子大
B 2・C 3 大学は学科別

5. 分析

5.1 高校・現役 or 浪人と大学ランクの関連

まず、これまで教育社会学を中心に、述べられてきた高校ランクと大学ランクとの関連をみていく。そして、現役 or 浪人と大学ランクとの関連をみていく。こうすることで、本研究が依拠するデータの概観を示すことができ、またいくつかの基本的な知見を示すことができる⁵⁾。

まずは、「どのような高校に進学するかがその後の進路に影響する」というこれまでの先行研究の知見を確認してみよう。表3は、高校ランク⁶⁾と大学ランクをクロス集計した

表3 高校ランクと大学ランクのクロス表

高校	大 学			合計	N
	A	B	C		
A	49.7%	40.2%	10.1%	100.0%	604
B	31.2%	52.0%	16.9%	100.0%	433
C	11.7%	49.6%	38.8%	100.0%	240
D	11.4%	35.0%	53.6%	100.0%	140
合計	33.8%	44.9%	21.3%	100.0%	1,417

ものである。

表にもあるように、大学ランクが高いほど高校ランクが高くなっている。つまり、ローゼンバウムの示す下降にのみ開かれているトーナメント移動、竹内の示す若干の逆転がある御破算移動が本調査にもみとれる。

次に、現役 or 浪人と大学ランクとの関連をみてみよう。浪人することは、現役よりもさらに1年以上勉強することになるので、単純に考えてみても浪人の方がより高い大学ランクに入学する可能性はあるはずである。実際にデータからみた場合、どのような結果になっているのであろうか。

図1をみてもわかるように、浪人する方が現役よりもより難易度の高い大学に入学しており、上昇移動に効果をもっていることがわかる。「浪人することで再チャレンジし敗者復活、もしくはさらに難易度の高い志望大学をねらえる」という巷説は、こうした結果からいわれている

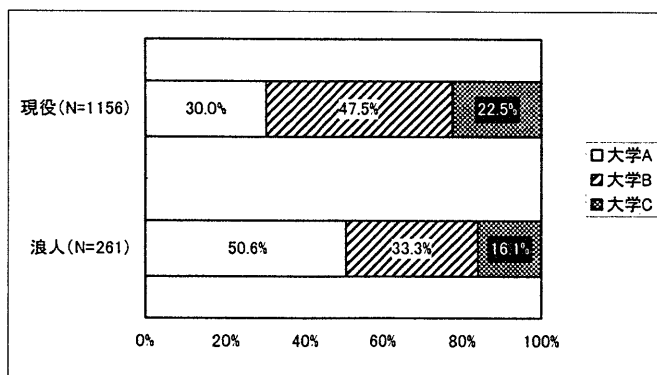


図1 現役 or 浪人と大学ランク

のであろう。

「どのような高校に進学するかがその後の進路に影響する」という先行研究による知見や、「浪人することで再チャレンジし敗者復活、もしくは、さらに難易度の高い志望大学をねらえる」という巷説をここまでの分析で確認した。しかし、それぞれの分析は、他の要因の影響を取り除いていない。特に、高校ランク×大学ラ

表4 現役 or 浪人×高校ランク×大学ランクのクロス表

高校		大 学			合計	N
		A	B	C		
現役	A	47.0%	43.3%	9.7%	100.0%	466
	B	26.7%	56.0%	17.3%	100.0%	352
	C	9.5%	50.0%	40.5%	100.0%	210
	D	10.9%	35.2%	53.9%	100.0%	128
	合計	30.0%	47.5%	22.5%	100.0%	1,156
浪人	A	58.7%	29.7%	11.6%	100.0%	138
	B	50.6%	34.6%	14.8%	100.0%	81
	C	26.7%	46.7%	26.7%	100.0%	30
	D	16.7%	33.3%	50.0%	100.0%	12
	合計	50.6%	33.3%	16.1%	100.0%	261

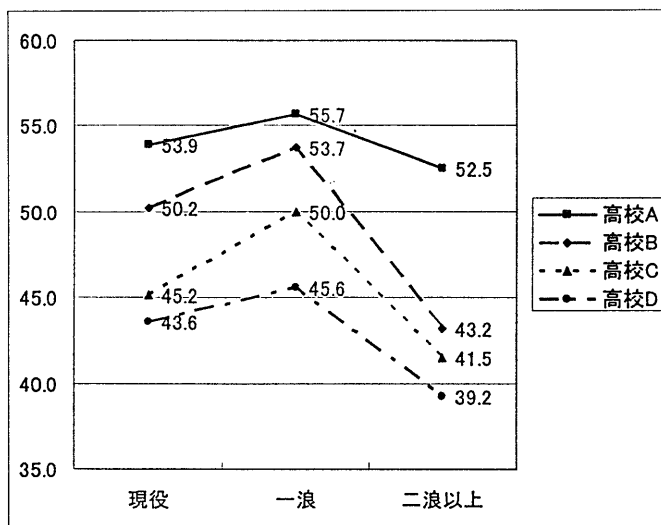


図2 各高校ランクの現役・一浪・二浪以上の大学難易度平均

ンク（表3）に関して、現役 or 浪人の効果がトラック間の移動に大きく影響していると考えられる。そこで、現役 or 浪人でコントロールし、高校ランクと大学ランクとの関連を再度分析してみよう。

まず、上段の現役での高校ランク×大学ランクの表から確認してみよう。高校ランクBで、26.7%が大学ランクAに進学している一方、高校ランクAで、大学ランクB・Cに進学している53.0%が大学ランクAに進学できておらず、若干の敗者復活は浪人せずとも可能であることがうかがえる。しかし、下段の浪人での高校ランク×大学ランクの表をみると、現役において、高校ランクBの者が大学ランクAに進学する比率が、現役時とくらべても大幅に上昇しており、50.6%となっている。また、高校ランクBにおけるメインルートと考えられる大学ランクBには、現役時では56.0%が進学している。しかし、浪人することによって、そのメインルートが34.6%にまで減少し、大学ランクAへの進学率が50.6%となっている。つまり、竹内のいう敗者復活やトラック間の上昇移動は、やはり浪人することによってなされている部分がかかなり大きいことが推測される。

では、実際に入学した大学難易度の平均値はどのくらいであろうか。図2は現役、一浪、二浪以上に分類し、入学した大学難易度の平均がどのくらいかを高校ランクごとに示したものである。

図をみると、確かに浪人することは効果があり、各高校ランクでその効果を確認することができる。高校ランクAの現役大学入学者の大学難易度平均は53.9である一方、高校ランクBの浪人大学入学者の大学難易度平均は53.7とほぼ同じ数値になっている。同様の現象が高校ランクBの現役（50.2）と高校ランクCの一

浪（50.0）との関係、高校ランクCの現役（45.2）と高校ランクDの一浪（45.6）との関係にもみられる。つまり、一浪すれば1ランク上の高校の現役大学入学者に追いつくことが可能なのである。

しかし、そのような浪人効果は一浪までの話であり、二浪以上することは結果的に効果がないように見え、むしろ現役大学入学者よりも入学した大学難易度の平均は低くなっている。とりわけ高校ランクB、C、Dにおいては、現役入学者にくらべてかなり大学難易度を低める傾向にある。例えば、高校ランクBの二浪以上の大学難易度の平均は43.2であるが、同じ高校ランクBの現役大学入学者50.2はおろか、1ランク下の高校ランクCの現役大学入学者45.2よりも低くなっている。同様の傾向が高校ランクC、Dにもみられ、二浪以上することは効果どころか、ランクを下げる結果⁷⁾となっており、高校ランクAとB、C、Dとの二極化が生じている。

一浪することでの学力上昇は確かにみられた。しかし、二浪することによる効果はないどころか逆効果になっているようにみえる。二浪することは一浪してさらにもう一年受験勉強するわけであるから、もう1ランクの上昇が望めると考えるのが普通である。では、なぜ二浪以上は大学難易度を下げてしまうのであろうか。

5.2 浪人と高校成績の関連

まず考えられることは、現役時の高校成績がランク上昇の足枷となっている可能性がある。つまり、高校での成績があまりにも下位であるため、出身高校ランクに見合う大学に進学することが難しいとき、浪人することでそれに見合う大学に進学する「トラック是正」が考えられる。では、浪人、とりわけ二浪以上の者は高校での成績が下位に位置しているのであろうか。

サンプル数の問題ではっきりと傾向を示すことはできないが、確かに現役よりも全体的に浪人している方が高校時の成績がやや低い傾向に

表5 高校ランク×現役 or 浪人×高校成績のクロス表

	現役 or 浪人	高 校 成 績			合計	N
		上	中	下		
高 校 A	現役	46.8%	26.4%	26.8%	100.0%	466
	一浪	32.5%	26.2%	41.3%	100.0%	126
	二浪以上	25.0%	25.0%	50.0%	100.0%	12
	合計	43.4%	26.3%	30.3%	100.0%	604
高 校 B	現役	47.7%	33.5%	18.8%	100.0%	352
	一浪	36.5%	48.6%	14.9%	100.0%	74
	二浪以上	28.6%	42.9%	28.6%	100.0%	7
	合計	45.5%	36.3%	18.2%	100.0%	433
高 校 C	現役	49.0%	35.2%	15.7%	100.0%	210
	一浪	40.0%	44.0%	16.0%	100.0%	25
	二浪以上	80.0%	20.0%	0.0%	100.0%	5
	合計	48.8%	35.8%	15.4%	100.0%	240
高 校 D	現役	53.1%	29.7%	17.2%	100.0%	128
	一浪	55.6%	44.4%	0.0%	100.0%	9
	二浪以上	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	3
	合計	52.1%	32.1%	15.7%	100.0%	140

ある。しかし、二浪以上の者の高校成績が押し並べて低い傾向にあるわけではない。こうした結果は、高校成績がランク上昇の足枷となっているわけではないことを示している。

5.3 浪人することは大学進学にどのくらい効果があるのか

クロス集計による分析によって、5.1では、高校ランクが高いほど、現役よりも浪人している方が、よりランクの高い大学に進学していた。しかし、浪人にも限界があり、二浪以上している場合、現役や一浪よりもランクの低い大学に入学していることが確認された。そして5.2

表6 変数リスト

<従属変数>	変数内容	変数値
大学難易度	難易度別	表2で示した入試難易度
<説明変数>	変数内容	変数値
父学歴	父教育年数	18：大学院 16：大学 14：短大・高専 12：高校 9：中学校
高校ランク	難易度別	4：高校ランクA 3：高校ランクB 2：高校ランクC 1：高校ランクD
高校成績	高校成績	3：上 2：中 1：下
現浪	現役か浪人か	0：現役 1：一浪 2：二浪以上

表7 大学難易度を規定する要因・重回帰分析

	全体 (N=1,417)	
	非標準化係数	標準化係数
(定数)	24.363	***
父学歴	.384	.093***
高校ランク	3.858	.420***
高校成績	3.205	.278***
現浪	1.504	.074***

R²=0.258***

***p<0.1%

において提示された、高校時の成績が長期の浪人を強いているのではないかと検討したところ、そのような傾向がないことが示された。では、それぞれの変数が独立してどれほど大学ランクに効果を持つのであろうか。特に、どのような高校に入学したかがその後の進路に大きく影響することは、先行研究においてもこれまで多く確認されている。そのため、重回帰分析を用いて、大学ランクへの高校ランク効果と浪人効果を比較し、浪人によるトラック間の上昇移動がいかにか有効かを具体的な数値で確認してみよう。分析に用いる変数については表6に示すとおりである。

表7は大学難易度を従属変数とした重回帰分析の結果である。各変数がどの程度の効果を持つのか検討していこう。表7が示すとおり、大学難易度にもっとも大きい効果を持つのは高校ランクである。一方で浪人の効果は、高校ラン

クにくらべると、効果ははるかに小さい。しかし、さらに注目すべきことは、浪人することで大学難易度に及ぼす効果が時間順序からすれば、もっとも直前であるにも関わらず、父学歴の方が効果を持つことである。

浪人することは確かに効果があるようだ。しかし、図2にもあるように、二浪以上が大きく大学難易度の平均を下回るため、

表7の重回帰分析では高校ランクはおろか、父学歴の効果にも及ばない結果になった。そこで、二浪以上を除いて再度分析をおこなってみよう。二浪以上が大きく効果を下げる要因であるならば、それを除くことでかなりの浪人効果を得られるはずである。表8は二浪以上（サンプル数27）を分析から除いた重回帰分析の結果である。

表8 大学難易度を規定する要因・重回帰分析

(二浪以上を除く)

	全体 (N=1,390)	
	非標準化係数	標準化係数
(定数)	22.771	***
父学歴	.391	.095***
高校ランク	3.733	.408***
高校成績	3.240	.283***
現浪	3.147	.129***

R²=0.270***

***p<0.1%

父学歴、高校ランク、高校成績の効果は二浪以上を含めて分析した表7の結果とそれほど大きな違いはない。しかし、二浪以上を除いた浪人の効果は、標準化係数では.074→.129となり、非標準化係数に関しても1.504→3.240と約2倍になっている。また、父学歴の効果と比較しても、表8では父学歴よりも大きな効果を持つようになっている。

6. 結論

本研究では、大学進学への最後の挽回チャンスとされる浪人効果を検討することに焦点を置き、論じてきた。浪人効果について計量的に分析した結果、(1)先行研究により明らかにされてきた、高校ランクが高いほど、進学先である大学ランクがより高くなること、本研究のデータにおいても同様の傾向にあった。そして浪人することは、現役で大学に入学するよりも、入学する大学難易度をより高める効果が確認された。荻谷(2001)は、高校生の学習時間が社会階層の下位において著しく少ないことを示した(荻谷 2001:159-162)が、学力が足りず、現役で大学に入学できなかった者は、浪人することで、現役時の学習時間を補っていると考えられ、程度の差こそあるが、確かに浪人することによる効果が確認されたといえる。また、さらに二浪することは、一浪してさらにもう一年受験勉強するわけであるから、もう1ランクの上昇が望めると考えるのが普通である。しかし、(2)二浪以上することは、大学難易度が結果的に低くなっており(図2)、さらには同じ高校ランクであっても、入学する大学難易度が現役で大学に入学した者より、低い結果となった。高校時の成績が下位であるため、このような結果になったかと思われたが、表5でも示されたように、単純にそうとは言いきれないようだ。浪人効果は長期にわたっておこなえば、単純に比例してその効果を増すのではないことが示唆された。

では、なぜ二浪以上は大学難易度を下げてしまふのであろうか。それは1年の浪人であれば友人も多く、共に受験勉強に立ち向かうことができる。しかし、2年、3年ともなれば同学年の友人も少なくなり⁸⁾、さらなるプレッシャー、つまり「現役時はもちろん一浪時よりも、さらに上の大学に入学しなければならない」という

圧迫感を抱くことになる。また、家族への後ろめたい気持ちから不安や孤独感にも苛まれた結果、勉強が疎かになり、受験勉強に対する「意欲の低下」を招くことになるのであろう。そしてさらに(3)二浪以上において入学する大学難易度の低下が、高校ランクAとB、C、Dとで大きく二極化している。だが、こうした二浪以上の大学難易度低下の二極化は、当然の結果なのではないだろうか。荻谷の学習に対する意欲の低下が、社会階層の下位において顕著に低下しており、二極分化していること(荻谷 2001:218-220)を援用すると、高校ランクを社会階層が強く規定しているのであれば、高校ランク下位(ここではB、C、Dにあたる)における二浪以上の者の大学難易度の著しい低下は、意欲の低さが招いた結果といえるのである。また、二浪以上の者の大学難易度が、一貫して低下していることから、確かに同年代からひとり残されて受験勉強をするのは、かなりの「意欲」を必要とすることが推察される。仮にそうだとするならば、浪人(一浪までだが)により上昇するのは学力だけであり、意欲を維持するまでには至ってはならず、本来ならば大学での勉強に向けられたはずの「意欲」を浪費することで、浪人が行なわれている可能性も考えられる。

高等教育が大衆化し、入学試験における選抜が易化している。だが、浪人率の著しい減少はみられず、上位の大学では、依然として激しい選抜が続いているといえる。本稿では、大学に入学できた者を対象とした研究であったので、大学に入学できなかった現役、浪人を扱っていない。そのため、浪人することによる効果を完全に捉えているとはいえない。入学できなかった者も含めれば、浪人の方が平均偏差値は低いかもしれない。また、大学に入学できたか否か、という2値で考えた場合、もしかしたら現役の方が浪人よりもその確率が高いのかもしれない。本稿はそうした欠点が多く存在するが、具体的な数値で示された先行研究がいまだに少ないこ

とも確かである。そうしたなかで、本稿での計量分析からのアプローチは、これまで手付かずであった実態を具体的な数値を用いて明らかにしたといえる。

注

- 1) トロウは高等教育の発展段階を次のように示している。
 - ①エリート⇒高等教育システムの最初の段階。限られた少数者を対象とし、大学適齢人口の15%までとする。大学の機能はその国の支配階級の形成を行なう。
 - ②マス⇒伝統的なエリート型大学制度の拡張だけでなく、多くの学生の要求に応じるため、大衆的な非エリート型へと移行する。大学適性人口の15~50%とかなり多くなるが、量的な側面だけでなく、学生の進学動機、入学選抜の機能など、質的な変化があらわれる。
 - ③ユニバーサル⇒適齢人口の50%以上。高等教育への接近が義務化し、指導層の育成から産業社会への全国民の育成へとその性格が変容する。
- 2) もちろん、この数字は大学・短期大学に合格した者だけであり、不合格者は含まれていない。
- 3) 高校ランクが高いということは、現役時でも入学できる大学があるにもかかわらず、浪人してさらに難易度の高い大学に入学しようとしているととらえることもできる。
- 4) もちろん、これ以降にも、アメリカにおけるトラッキング研究はおこなわれている。例えば、Hallinan (1996) の研究では、Secondary School におけるトラッキング移動が属性や収入によって左右されることを示している。
- 5) 付表1は父学歴と大学ランクとのクロス表である。表をみてもわかるように、大学ランクが高いほど、父学歴も高い傾向にある。

付表1 大学ランクと父学歴とのクロス表

大学	父 学 歴				合計	N
	中学	高校	短大 高専	大 学 大学院		
A	2.9%	23.6%	2.7%	70.8%	100.0%	479
B	2.8%	36.9%	2.0%	58.2%	100.0%	636
C	5.6%	42.7%	2.3%	49.3%	100.0%	302
合計	3.5%	33.7%	2.3%	60.6%	100.0%	1,417

- 6) 高校ランクの分類には2004年6月12日発行「サンデー毎日特別増刊 大学入試全記録「高校の実力」完全版 — 5056高校別462大学合格者」

を使用した。Part 1 で3,975高校と462大学のマトリックス、Part 2 でPart 1 に掲載できなかった1081高校を掲載している。この高校分類には、次のものも含めて掲載されているので、ランクを分類する指標として併用した。

- ・2004年4月18日発行「サンデー毎日」記載の全国有名804高校主要大学合格者数
⇒例年、有名大学への進学率が高い高校を掲載している。
- ・2004年4月25日発行「サンデー毎日」記載の1,380高校主要大学合格者
⇒先の804高校主要大学合格者数も含めた進学率数の高い高校を掲載している。

高校分類方法は以下のとおりである。

- Aランク→2004年4月18日発行「サンデー毎日」掲載、「全国有名804高校主要大学合格者数」
- Bランク→2004年4月25日発行「サンデー毎日」掲載、「1380高校主要大学合格者数」の1,380校からAランクの804校を除いた576高校と、「サンデー毎日特別増刊 大学入試全記録 — 5,056高校別462大学合格者」Part 1 において高校卒業数のうち掲載された有力大学（偏差値50以上）合格者数が40%以上の高校
- Cランク→Part 1 において高校卒業生数のうち掲載大学全合格者数が20%以上の高校
- Dランク→Part 1 において高校卒業生数のうち掲載大学合格者数が20%以下の高校と、Part 2 に掲載された高校、またはPart 1・Part 2 掲載されていない高校

- 7) この難易度は各受験生の模擬試験から得られた正確な学力を表す数値ではない。しかし、結果的に入学した大学難易度から算出したものであることから、この数値は現役、一浪、二浪以上の学力としての判断材料とみてもよいだろう。
- 8) 本データは社会学系という文系に限られているが、付表1にある通り、二浪以上する者は極端に少なくなっている。

付表2 現役・一浪・二浪以上の度数

	度数	%
現 役	1,156	81.6
一 浪	234	16.5
二浪以上	27	1.9
合 計	1,417	100.0

参考・引用文献

- ベネッセ未来教育センター, 1999, 『モノグラフ・高校生の世界 VOL.57』
- 後藤誠也, 1961, 「浪人に関する一考察」『教育社会学研究』第16集: 86-98。
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有伸堂高文社。
- 菊池栄治, 1986, 「中等教育における「トラッキング」と生徒の分化過程——理論的検討と事例研究の展開」『教育社会学研究』第41集: 136-150。
- 近藤博之, 1982, 「高校卒業生の経歴と学校教育の規定力」『教育社会学研究』第37集: 106-117。
- Martin, Trow, 1973, Problems in the transition from elite to mass higher education, (=

1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版)。

Hallinan, Maureen, T, 1996, "Track Mobility in Secondary School," Social Forces, 74 (3): 983-1002。

尾嶋史章編, 2001, 『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房

Rosenbaum, J. E. 1976, "Making Inequality." The Hidden Curriculum of High School Tracking, Wiley-Interscience。

関口 義, 1956, 「予備校」『教育社会学研究』第10集: 70-81。

竹内 洋, 1991, 「日本型選抜の探求——御破算型選抜規範」『教育社会学研究』第49集: 34-56。

塚田 守, 1999, 『浪人生のソシオロジー——一年の予備校生活』大学教育出版。

吉本圭一, 1984, 「高校教育の階層構造と進路分化」『教育社会学研究』第39集: 172-186。

和田淑彦, 1984, 「浪人生の学力と入試事情」『大学進学研究』6 (2): 20-22。

(にしまる りょういち

同志社大学大学院社会学専攻博士課程)